

銀河鉄道の夜

原作 宮沢賢治

ジョバンニ

カムパネルラ

先生

工員

ジョバンニの母

ザネリ

牛乳屋1

大学生

鳥捕り

車掌

青年

女の子

乗客

サソリ

牛乳屋2

カムパネルラの父

お前の友達がどこかへ行ったのだろう

ああ、どうしてなんですか

あの人はね、本当に今夜、遠くへ行ったのだ

お前はお前の切符をしっかりと持っておいで

僕はカムパネルラと一緒に真つすぐに行こうと云ったんです

みんながそう考える。けれども一緒には行けない

僕はどうしてそれを求めたらいいでしょう

みんながめいめい、自分の神様が本当の神様だというだろう

それから、僕たちの心が良いとか悪いとか議論するだろう

そして勝負がつかないだろう

あらゆる人のいちばんの幸福を探し、みんなと一緒に早くそこに行くがいい

さあ、切符をしっかりと持っておいで

お前が会うどんな人でも、みんながカムパネルラだ

さあ、切符をしっかりと持っておいで

そこでばかり、お前は本当にカムパネルラといつまでも一緒に行けるのだ

先生は黒板に吊るした大きな黒い星座の図の、上から下へ白くけぶった銀河帯のようなところを指しながら、みんなに問いをかけました。

カムパネルラが手をあげました。それから四、五人手をあげました。

ジヨバンニも手をあげようとして、急いでそのままやめました。

たしかにあれがみんな星だと、いつか雑誌で読んだのですが、このごろは毎日教室でも眠く、本を読むひまも読む本もないので何だかどんなこともよく分からないという気持ちがあるのです。

ジヨバンニは勢いよく立ち上がりましたが、立って見るともうはつきりとそれを答えることが出来ないのです。

ザネリが前の席から振り返ってクスツと笑いました。

先生はしばらく困った様子でしたが、眼をカムパネルラのほうへ向けました。

すると、あんなに元気に手をあげたカムパネルラが、やはりもじもじ立ち上がったまま答えることが出来ませんでした。

先生は意外なようにしばらくじっとカムパネルラを見ていましたが、そのうち、自分で星図を指しました。

そう考えるとたまらないほど、自分もカムパネルラも哀れなような気がするのです。

先生「では、みなさんはそういうふう川だと云われたり、ミルクの流れたあとだと云われたりしていた、このぼんやりと白いものが本当は何かご承知ですか」

カムパネルラ「はい」

生徒たち「はい」

ジヨバンニ「…」

先生「ジヨバンニさん、あなたは分かっているのでしょうか」

ジヨバンニ「…」

先生「大きな望遠鏡で銀河をよく調べると銀河は大体何でしょう」

ジヨバンニ「…」

先生「では、カムパネルラさん」

カムパネルラ「…はい…」

先生「では、よし。このぼんやりと白い銀河を大きな望遠鏡で見ますと、もうたくさんの小さな星に見えるのです。ジヨバンニさん、そうでしょう」

ジヨバンニ「そうだ。僕は知っていたのだ。もちろん、カムパネルラも知っている。それはいつかカムパネルラの家と一緒に読んだ雑誌の中にあったのだ。真っ黒なページいっぱい白い点々のある美しい写真を二人でいつまでも見たんだ。それをカムパネルラが忘れるはずもなかったのに、すぐに返事をしなかったのは、このごろ僕が朝にも午后にも仕事が多く、みんなともはきはき遊ばず、カムパネルラともあんまり物を云わないようになったので気の毒がってわざと返事をしなかったのだ」

先生「ですから、もしもこの天の川が本当に川だと考えるなら、その一つ一つの小さな星はみんなその川底の砂や砂利の粒にもあたるわけです。またこれを大きなミルクの流れと考えるなら、もっと天の川とよく似ています。つまりその星はみんな、ミルクのなかにまるで細かに浮かんでいる脂の球にもあたるのです。そんなら、何がその川の水にあたるかと云いますと、それは真空という光がある速さで伝えるもので、太陽や地球もやっぱりその中に浮かんでいる。つまりは私どもも天の川の水のなかに住んでいるわけです。その中の様々な星については、もう時間ですからこの次にお話しします。今日はその銀河のお祭りなのですから、みなさんは外へ出てよく空をのぞきなさい。では、ここまでです。起立、礼」

全員「さようなら」

二場 活版所

ジヨバンニが学校の門を出るとき、同じ組の何人かは家へ帰らずカムパネルラを真ん中にして、校庭の隅の桜の木のところが集まっていました。

それは今夜の星祭りに青いあかりをこしらえて、川へ流す烏瓜を取りに行く相談らしかったのです。

ジヨバンニは手を大きく振って、どしどし学校の門を出ていきました。町の家々では、お祭りのためにいちいの葉の玉を吊るしたり、ひのきの枝にあかりをつけたり色々支度をしているのでした。

家へは帰らず、ジヨバンニは町にある大きな活版所に入って行きました。入口の計算台に居た、だぶだぶの白いシャツを着た人におじぎをして突き当たりの大きな扉をあけました。

中にはまだ昼なのに電燈がついて、たくさんの輪転器がばたりばたりとまわり、大人たちが何か歌うように読んだり数えたりしながら働いておりました。

ジヨバンニは入口から三番目に高いテーブルに座った人の所へ行っておじぎをしました。

工員「これだけ拾っていけるかね」  
ジヨバンニ「はい」

ジヨバンニは一枚の紙切れを受けとると、テーブルの足もとから小さな平たい函を取り出して、壁の隅にしゃがみ込み粟粒ぐらいの活字を次から次へと拾いはじめました。

工員「よう、虫めがねくん。おはよう」

ジヨバンニは何べんも眼を拭いながら活字をだんだん拾いました。六時がうってしばらく経ったころ、ジヨバンニは拾った活字と紙切れを引き合わせてから、さっきのテーブルの人へ持って行きました。

その人は黙ってそれを受けとって微かにうなずき、それから小さな銀貨を一つジヨバンニに渡しました。

ジヨバンニは俄かに顔色が良くなって威勢よくおじぎをすると表へ飛びだしました。それから元氣よく口笛を吹きながら、パン屋へ行ってパンの塊を一つと角砂糖を一袋買いますと一目散に走り出しました。

### 三場 ジヨバンニの家

ジヨバンニ「お母さん、いま帰ったよ。具合悪くなかったの」

ジヨバンニが帰って来たのは、ある裏町の小さな家でした。

母「ああ、ジヨバンニ。お仕事がひどかったろう。今日は涼しくてね、私はずうつと具合がいいよ」

ジヨバンニ「お母さん、今日は角砂糖を買ってきたよ。牛乳に入れてあげようと思って」

母「ああ、お前さきにおあがり。あたしはまだ欲しくないんだから」

ジヨバンニ「お母さん。姉さんはいつ帰ったの」

母「三時ころ帰ったよ。みんなそこらをしてくれてねえ」

ジヨバンニ「お母さんの牛乳は来ていないんだらうか」

母「来なかつたらうかねえ」

ジヨバンニ「僕、行って取ってこよう」

母「ああ、あたしはゆっくりでいいんだから、お前さきにおあがり。姉さんがね、トマトで何かこしらえてそこへ置いていったよ」

ジヨバンニ「では、僕食べよう。ねえ、お母さん。僕、お父さんはきつと間もなく帰ってくると思うよ」

母「ああ、あたしもそう思う。けれども、お前は どうしてそう思うの」

ジヨバンニ「だって今朝の新聞に今年は北のほうの漁は大変よかつたと書いてあつたよ」

母「ああ、だけどねえ、お父さんは漁へ出ていないかも知れない」

ジヨバンニ「きつと出ているよ。お父さんが監獄へ入るような悪いことをしたはずがないんだ。この前、学校に寄贈した大きな蟹の甲羅だのトナカイの角だの、今だつてみんな標本室にあるんだ」

母「お父さんはこの次はお前にラッコの上着を持ってくると云つたねえ」

ジヨバンニ「みんなが僕に会うとそれを云うよ。冷やかすように云うんだ」

母「お前に悪口を云うの」

ジヨバンニ「うん、けれどもカムパネルラなんか決して云わない。みんながそんなことを云うときは気の毒そうにしているよ」

母「あの人のお父さんはね、うちのお父さんとちようどお前たちのように小さいときからのお友達だったそうだよ」

ジヨバンニ「ああ、だからお父さんは僕をつれてカムパネルラのうちへも行ったよ。あの頃は良かったなあ。学校から帰る途中、たびたびカムパネルラのうちに寄った。アルコールランプで走る汽車があったんだ。レールを七つ組み合わせるのと円くなって、それに電柱や信号標もついていて、信号標のあかりは汽車が通るときだけ青くなるようになっていたんだ。いつかアルコールが無くなつたときに石油を使ったら罐がすっかり煤けたよ」

母「そうかい」

ジヨバンニ「今も毎朝、新聞をまわしに行くよ。けれどもいつでも家中しいんとしているからな」

母「時間が早いからねえ…」

ジヨバンニ「ザウエルという犬がいるよ。僕が行くと鼻を鳴らしてついてくるんだ。ずうっと町の角までついてくる。今夜はみんなで烏瓜のあかりを川へ流しに行くんだって。きつと犬もついていくよ」

母「そうだ、今晚は銀河のお祭りだねえ」

ジヨバンニ「うん、牛乳をとりながら見てくるよ」

母「ああ、行っておいで。川へは入らないでね」

ジヨバンニ「僕、岸から見ただけなんだ。一時間で行ってくるよ」

母「もつと遊んでおいで。カムパネルラさんと一緒に心配はないから」

ジヨバンニ「ああ、きつと一緒にだよ。では、一時間半で帰ってくるよ」

四場 ケンタウル祭の夜

ジヨバンニは口笛を吹いているようなさびしい口つきで、檜のまっ黒にならんだ町の坂を下りてきたのでした。

坂の下に大きな一つの街燈が青白く立派に光って立っていました。

ジヨバンニ「僕は立派な機関車だ。ここは勾配だから速いぞ。僕は今その電燈を通り越す。

そうら、今度は僕の影法師はコムパスだ。あんなにくるっと回って前のほうへ来た」

ジヨバンニが思いながら、大股にその街燈の下を通り過ぎたとき、いきなり昼間のザネリが向こう側の暗い小路から出てきました。

ジヨバンニ「ザネリ、烏瓜を流しに行くの」

ザネリ「ジヨバンニ、お父さんからラッコの上着が来るよ」

ジヨバンニ「何だい、ザネリ」

ジヨバンニは高く叫び返しましたが、もうザネリは向こうのひばの植わった家の中に入ってしまった。

ジヨバンニ「ザネリはどうして僕が何にもしないのにあんなことを云うのだろう。走ると

きはまるで鼠のようなくせに。あんなことを云うのはザネリが馬鹿だからだ」

ジヨバンニはせわしく色々なことを考えながら、さまざまの灯りや木の枝ですっかりきれいに飾られた街を通って行きました。

時計屋の店には明るくネオン燈がついて一秒ごとに、石でこさえたふくろうの赤い眼がくるつくると動いたり。

色々な宝石が海のような色をした厚い硝子の盤に載って星のようにゆっくり循環したり。

また向こう側から銅の人馬がゆっくりこちへまわって来たりするのです。

そのまん中に円い黒い星座早見が青いアスパラガスの葉で飾ってありました。



ジヨバンニは我を忘れてその星座の図に見入りました。

それは学校で見たあの図よりはずうっと小さかったのですが、その日と時間に合わせて盤をまわすと、そのとき出ているそらがそのまま楕円形の中にめぐってあらわれるようになっていました。

そのまん中には上から下にかけて銀河がぼうっとけむったような帯になって、その下の方ではかすかに爆発して湯気でもあげているように見えるのでした。

またいちばん後ろの壁には空じゅうの星座をふしぎな獣や蛇や魚や瓶の形に書いた大きな図がかかっていました。

ジヨバンニ「本当にこんなサソリだの勇士だの、空にぎっしり居るだろうか。ああ、僕はその中をどこまでも歩いてみたい」

ジヨバンニはしばらくぼんやり立っていました。俄かにお母さんの牛乳のことを思い出してその店をはなれました。

空気は澄みきってまるで水のように通りや店の中を流れましたし、街燈はみな真っ青なもみや櫛の枝で包まれ、電気会社の前のプラタヌスの木などは、中に沢山の豆電燈がついて本当にそこらは人魚の都のように見えるのでした。

子どもらは、みんな新しい折りのついた着物を着て、星めぐりの口笛を吹いたり、青いマグネシヤの花火を燃したりして楽しそうに遊んでいるのでした。

ジヨバンニ「こんばんは、ごめんなさい」

牛乳屋 1「何かご用ですか」

ジヨバンニ「あの、今日、牛乳が僕のところへ来なかったので貰いにあがったんです」

牛乳屋 1「今、誰も居ないので分かりません。明日にしてください」

ジヨバンニ「おっかさんが病気なんです。今晚でないと困るんです」

牛乳屋 1「では、もう少し経ってから来てください」

ジヨバンニ「そうですか…では、ありがとうございます」

十字になった町のかどを曲がろうとしましたら、向こうの雑貨店の前で数人の生徒らが口笛を吹いたり笑ったりして、めいめい烏瓜のあかりを持ってやって来るのを見ました。

ジヨバンニ「…川へ行くの」

ザネリ「ジヨバンニ、ラッコの上着が来るよ」  
子供たち「ジヨバンニ、ラッコの上着が来るよ」

ジヨバンニはまっ赤になって急いで行き過ぎようとしたら、その中にカムパネルラが居たのです。気の毒そうに黙って、少し笑って怒らないだろうかというようにジヨバンニのほうを見ていました。

ザネリ「みんな、こんな奴はほうっておいて、もう行こうぜ」  
ジヨバンニ「…カムパネルラ…」

ジヨバンニは何とも云えずさびしくなって、いきなり走り出し黒い丘のほうへ急ぎました。すると耳に手をあてて片足でびよんびよん跳んでいた小さな子供らは、ジヨバンニが面白くてかけるのだと思ってわあいと叫びました。

五場 天気輪の柱

牧場のうしろはゆるい丘になって、その黒い平らな頂上は北の大熊星の下にぼんやり普段よりも低く連なって見えました。

ジヨバンニはもう露の降りかかった小さな林のこみちをどんだんのぼって行きました。まっくらな草や色々なかたちに見える藪のしげみの間を、その小さな道が一すじ白く星あかりに照らされてあったのです。

草の中にはびかぴか青光りを出す小さな虫もいて、ある葉は青くすかし出されジヨバンニはさつきみんなの持つて行った烏瓜のあかりのようだとも思いました。

俄かにがらんと空がひらけて天の川がしらしらと南から北へ互っているのが見え、また頂の天気輪の柱も見分けられたのでした。

つりがね草か野ぎくかの花が夢の中からでも薫りだしたというように咲き、鳥が一匹、丘の上を鳴き続けながら通っていきました。

ジヨバンニは頂の天気輪の柱の下に来て、どこかする身体をつめたい草に投げました。

ジヨバンニ「町がまるで海の底のお宮のようだ。あ、汽車の音が聞こえる。あの中では、  
たくさんの旅人がリングを剥いたり、笑ったりしているのだろうか…ああ、  
あの白い空の帯がみんな星だというぞ」

銀河ステーション、銀河ステーション

ジヨバンニ「…」

ジヨバンニは青い琴の星が三つにも四つにもなあってちらちら瞬き、脚が何べんも出たり引っ込んだりして、とうとう藪のように長く延びるのを見ました。

銀河ステーション、銀河ステーション

ジヨバンニのすぐうしろの天気輪の柱がいつかぼんやりした三角標のかたちになって、蛍のようにぺかぺか消えたり灯ったりしていました。

銀河ステーション、銀河ステーション

それは段々はつきりして、とうとう、りと動かないようになり濃い鋼青の空の野原に立ちました。

銀河ステーション、銀河ステーション

今、新しく灼いたばかりの青い鋼の板のような空の野原にまっすぐにすきつと立ったのです。

## 六場 銀河ステーション

どこかで不思議な声が出たかと思うと、いきなり眼の前がぱっと明るくなりました。

見ると、億万のホタルイカの火をいっぺんに化石させて、そら中に沈めたという具合。

また、ダイヤモンド会社で値段が安くならないために隠しておいた金剛石を、誰かがいきなりひっくり返してばら撒いたというふうには、眼の前がさあっと明るくなってジョバンニは思わず何べんも眼を擦ってしまいました。

気が付いてみると、ジョバンニは夜の軽便鉄道の黄色の電燈のなんだ車室に窓から外を見ながら座っていたのでした。

ゴトゴトゴトゴト、ゴトゴトゴトゴト

すぐ前の席に一人の子どもが窓から頭を出して外を見ているのに気が付きました。

そして、その子どももの肩のあたりがどうも見たことのあるような気がして、そう思うともう誰だか分かりたくてたまらなくなりました。

ジョバンニ「カムパネルラ：きみは前からここに居たの」

カムパネルラ「みんなはね、ずいぶん走ったけれども遅れてしまったよ。ザネリもね、ずいぶん走ったけれども追いつかなかった」

ジヨバンニ「…どこかで待っていようか」

カムパネルラ「ザネリはもう帰ったよ、お父さんが迎いに来たんだ」

ジヨバンニ「そうだ、僕たちは今、一緒にさそって出かけたのだ」

カムパネルラ「ああ、しまった。僕、水筒を忘れてきた。スケッチ帳も忘れてきた。けれど構わない、もうじき白鳥の停車場だから。僕、白鳥を見るのは本当に好きだ。川の遠くを飛んでいたって僕はきっと見える」

カムパネルラは円い板のようになった地図を、しきりにぐるぐる回して見ていました。

その中には白くあらわされた天の川の左の岸に沿って、一条の鉄道線路が南へ南へとたどって行くのでした。

夜のようにまっ黒な盤の上に、いちいちの停車場や三角標、泉水や森が、青や橙や緑や、うつくしい光でちりばめられてありました。

ジヨバンニは何だかその地図をどこかで見たように思いました。

ジヨバンニ「この地図はどこで買ったの。黒曜石でできてるねえ」

カムパネルラ「銀河ステーションでもらったんだ。きみ、もらわなかったの」

ジヨバンニ「僕、銀河ステーションを通ったろうか。今、僕たちの居るところ、ここだろう」

カムパネルラ「そうだ。おや、あの河原は月夜だろうか」

ジヨバンニ「月夜でないよ。銀河だから光るんだよ」

青白く光る銀河の岸に銀色の空のすすきが、風にさらさらさらさら揺られて動いて波を立てているのでした。

ジヨバンニ「僕はもうすっかり天の野原に来た。それにこの汽車、石炭をたいていないねえ」

ゴトゴトゴトゴト、その小さなきれいな汽車は、天の川の水や三角点の青白い微光の中をどこまでも、どこまでもと走って行くのでした。

燐光の三角標が或いは三角形、或いは四辺形。あるいは稲妻や鎖のかたち、様々にならんで野原いっぱい光っているのです。

カムパネルラ「アルコールか電気だろう。ああ、りんどうの花が咲いている。もうすっかり秋だねえ」

線路のへりになった短い芝草の中に月長石でも刻まれたような、すばらしい紫のりんどうの花が咲いていました。

ジヨバンニ「僕、飛び下りて、あいつを取ってまた飛び乗ってみせようか」

カムパネルラ「もうだめだ。あんなにうしろに行ってしまったから」

カムパネルラが、そう云ってしまうかしまわないうちに次のりんどうの花が、いっぱい光って過ぎていきました。

たくさんの黄色な底をもった花のコップが、湧くように雨のように眼の前を通り、三角標の列はいよいよ光って立ったのです。

#### 七場 北十字とプリオシン海岸

カムパネルラ「おっかさんは僕を許してくださいさるだろうか」

ジヨバンニ「ああ、そうだ。僕のおっかさんはあの遠い一つのちりのように見える、橙

いろの三角標のあたりにおいて、僕のことを考えているんだった」

カムパネルラ「僕はおっかさんが本当に幸せになるならどんなことでもする。けれども、

一体どんなことがおっかさんのいちばんの幸せなんだろう」

ジヨバンニ「きみのおっかさんは何にもひどいことないじゃないの」

カムパネルラ「僕、分からない。けれども、誰だって本当にいいことをしたら、いちばん

幸せなんだねえ。だから、おっかさんは僕を許してくださいさると思う」

俄かに、汽車の中がぱつと白く明るくなりました。見ると、きらびやかな銀河の流れのまん中に、ぼうつと青白く後光の射した一つの島がありました。

その島の平らないただきに眼もさめるような立派な白い十字架が、すきつとした金いろの円光をいただいて、静かに永久に立っているのです。

ハルレヤ、ハルレヤ、ハルレヤ、ハルレヤ

白鳥の島と十字架はだんだんうしろの方へうつって行きました。

向こう岸も青白くぼうつと光っていて、時々、やっぱりすすきが風にひるがえるらしく、さつとその銀いろがけむって息でもかけたように見え、たくさんのりんどうの花が草を隠れたり出たりするのは、やさしい狐火のように思われました。

ジヨバンニ「もうじき白鳥の停車場だねえ」

カムパネルラ「ああ、十一時かつきりには着くんだよ」

早くもシグナルの緑の燈とぼんやりした白い柱とがちらつと窓のそとを過ぎ、それから硫黄のほのおのような暗い転てつ機が通りました。

汽車はだんだんゆるやかにになって、間もなくプラットホームの一系列の電燈がうつくしく規則正しくあらわれ、二人は白鳥停車場の大きな時計の前に来てとまりました。

二十分停車

ジヨバンニ「僕たちも降りてみようか」

カムパネルラ「うん、降りよう」

二人は停車場の前の水晶細工のように見える銀杏の木に囲まれた小さな広場に出ました。そこから幅の広い道がまっすぐに銀河の青光りの中へ通っていました。

カムパネルラ「この砂はみんな水晶だ。中で小さな火が燃えている」

ジヨバンニ「そうだ」

川上のほうを見ると、すすきのいっぱいに見える崖の下に白い岩がまるで運動場のように平らに川に沿って出ているのです。

そこに何人かの人かが何か掘り出すか埋めるかしているらしく、立ったり屈んだり時々なにかの道具がピカッと光ったりしました。

カムパネルラ「おや、変なものがあるよ。くるみの実だよ、そら沢山ある。流れてきたん

じゃない。岩の中に入ってるんだ」

ジヨバンニ「大きいね、このくるみ、倍あるね。こいつは少しも痛んでない」  
カムパネルラ「早くあすこへ行ってみよう。きっと何か掘ってるから」

だんだん近づいてみると、大学士らしい人が手帳に何かせわしそうに書きつけながら、助手の人たちに夢中でいろいろ指図をしていました。

大学士「そのその突起を壊さないように。スコップを使いたまえ、スコップを。おっと、もう少し遠くから掘って。いけない、いけない、なぜそんな乱暴をするんだ。

きみたちは参観かね。くるみが沢山あったろう、それはまあ、ざっと百二十万年、第三紀のあとのころは海岸でね、この下からは貝がらも出る。いま、川の流れているところに塩水が寄せたり引いたりもしていたのだ。ここにはボスといってね…おいおい、そこ、つるはしはよしたまえ。ていねいに鑿でやってくれたまえ。ボスといってね、いまの牛の先祖で昔はたくさん居たやつが埋まってるんだ」

ジヨバンニ「標本にするんですか」

大学士「いや、証明するに要るんだ。ここは厚い立派な地層で百二十万年前ぐらいにできたという証拠も色々あがるけれども、僕らと違ったやつから見ても、ここはやっぱりこんな地層に見えるかどうか、あるいは風か水やがらんとした空かに見えやしないかということなのだ。わかったかい。けれども…おいおい、そこもスコップではいけない。そのすぐ下に肋骨がうずもれてる筈じゃないか」

カムパネルラ「もう時間だよ、行こう」

ジヨバンニ「ああ、ではわたくしどもは失礼いたします」

大学士「そうですか。いや、さよなら」

二人は白い岩の上を一生懸命、汽車におくれないように走りました。

そして本当に風のように走れたのです。息も切れず膝もあつくありませんでした。

ジヨバンニ「こんなにしてかけるなら、もう世界中だってかけれるや」

間もなく二人はもとの車室の席に座って、いま行ってきたほうを窓から見ていました。



八場 鳥を捕る人

鳥捕り「ここへかけてもようございますか」

ジヨバンニ「ええ、いいんです」

鳥捕り「あなた方はどちらへいらつしやるんですか」

ジヨバンニ「どこまでも行くんです」

鳥捕り「それはいいね、この汽車は実際、どこまででも行きますぜ」

カムパネルラ「あなたはどこへ行くんです」

鳥捕り「わっしはすぐそこで降ります。鳥をつかまえる商売でね」

ジヨバンニ「何鳥ですか」

鳥捕り「鶴や雁です。さぎも白鳥もです」

ジヨバンニ「鶴はたくさん居ますか」

鳥捕り「居ますとも。さつきから鳴いてまさあ、聞かなかったのですか」

ジヨバンニ「いいえ」

鳥捕り「いまでも聞こえるじゃありませんか。そら、耳をすまして聴いてごらん  
さあ」

二人は眼を挙げ、耳をすましました。ごとごと鳴る汽車のひびきと、すすきの風との間から、ころんころんと水の湧くような音が聞こえて来るのでした。

ジヨバンニ「驚、どうしてとるんですか」

鳥捕り「そいつはな、造作ない。さぎというものはみんな始終、天の川へ帰りますからね。川原で待っていて驚が脚をこういう風にして下りてくるところを、そいつが地べたへ着くか着かないうちにピタツと押さえちまうんです。すると、もう驚はかたまつて安心して死んじまいます。あとはもう分かりきつてまさあ。押し葉にするだけです」

カムパネルラ「驚を押し葉にするんですか、標本ですか」

鳥捕り「標本じゃありません、みんな食べるじゃありませんか」

カムパネルラ「おかしいねえ」

鳥捕り「おかしいも不審もありませんや。さあ、ごらんなさい。いまとつて来たばかりです」

ジヨバンニ「本当に驚だねえ」

カムパネルラ「眼をつぶってるね」

鳥捕り「ね、そうでしょう」

ジヨバンニ「驚はおいしいんですか」

鳥捕り「ええ、毎日注文があります。しかし、雁のほうがもっと売れます。雁のほ

うがずつと柄がいいし、手数がありませんからな。そら、こっちはすぐ食べられます。どうです、少しおあがりなさい」

鳥捕り、雁をジヨバンニとカムパネルラに渡す

ジヨバンニ「なんだ、やっぱりこいつはお菓子だ。チョコレートよりもっとおいしいけれども、こんな雁が飛んでいるもんか。この男はどこかそこの野原の菓子屋だ。けれども僕はこの人をばかにしながら、この人のお菓子を食べているのは大へん気の毒だ」

カムパネルラ「鷺のほうはなぜ手数なんですか」

鳥捕り「それはね、鷺を食べるには天の川の水あかりに十日もつるして置くかね、そうでなきや、砂に三四日うずめなきやいけないんだ。そうすると、水銀がみんな蒸発して食べられるようになるよ」

カムパネルラ「こいつは鳥じゃない。ただのお菓子でしょう」

鳥捕り「そうそう、ここで降りなきや」

ジヨバンニ「どこへ行ったんだらう」

窓の外に鳥捕りの姿が見える

カムパネルラ「あすこへ行ってる、ずいぶん奇体だねえ。きつとまた鳥をつかまえるとこだね。汽車が走って行かないうちに早く鳥がおけるといいな」

がらんとした桔梗色の空から、さつき見たような鷺がまるで雪の降るようにぎやあぎやあ叫びながら、いっばいに舞いおりてきました。

すると、あの鳥捕りはすっかり注文通りだというようにほくほくして、鷺のちぢめて降りて来る黒い脚を両手で片っ端から押さえて、布の袋の中に入れるのでした。

鳥捕り「ああ、せいせいました。どうも身体にちょうど合うほど稼いでいるくらい、いいことはありませんな」

鳥捕りが車内に戻って来ている

ジヨバンニ「どうしてあすこからいっぺんにここへ来たんですか」

鳥捕り「どうしてって、来ようとしたから来たんです。ゼンたい、あなた方はどちらからおいでですか」

ジヨバンニ「…」

カムパネルラ「…」

鳥捕り「ああ、遠くからですね」

## 9場 ジヨバンニの切符

車掌「切符を拝見いたします」

鳥捕り、切符を出す

車掌「あなた方のは」

カムパネルラ、切符を出す。ジヨバンニ、慌ててポケットを探り、中に入っていた紙切れを出す。

ジヨバンニ「…はい」

車掌「これは三次空間の方からお持ちになったのですか」

ジヨバンニ「何だか分かりません」

車掌「よろしゅうございます。サウザンクロスへ着きますのは、次の第三時ころになります」

鳥捕り「おや、こいつは大したもんですぜ。こいつはもう、本当の天上へさえ行ける切符だ。天上どこじゃない、どこでも勝手に歩ける通行券です。なるほど、こんな不完全な幻想第四次の銀河鉄道なんかどこまででも行けるはずでさあ。あなた方、大したもんですね」

ジヨバンニ「何だか分かりません」

カムパネルラ「もうじき鷲の停車場だよ」

ジヨバンニ「僕はどうしてこの人を気の毒に思うのだろう。鷲をつかまえてせいせいしたと喜んだり、人の切符をびっくりしたように横目で見て慌ててほめだしたり…」

カムパネルラ「そんなことを考えていると、もうこの見ず知らずの鳥捕りのために、持っているものでも食べるものでも何でもやってしまいたい、この人の本当の幸せになるなら僕が代わりに百年続けて立って鳥をとってやってもいいというような気がする」

二人「本当にあなたのほしいものは一体何ですか」

鳥捕りの姿は既に消えている

カムパネルラ「あの人、どこへ行ったろう」

ジヨバンニ「どこへ行ったろう。一体どこでまた会うのだろう。僕はどうしてももう少しあの人に物を云わなかったろう」

カムパネルラ「ああ、僕もそう思っているよ」

ジヨバンニ「僕はある人が邪魔なような気がしたんだ……」

カムパネルラ「何だかリンゴの匂いがある。僕いまリンゴのことを考えたためだろうか」

ジヨバンニ「本当にリンゴの匂いだよ。それから野茨の匂いもある」

青年、女の子、登場

女の子「あら、ここはどこでしょう。まあ、きれいだよ」

青年「ああ、僕たちはそらへ来たのだ。わたしたちは天へ行くのです。もう何にも怖いことはありません。わたしたちはこんないいところを旅して、じき神さまのそこへ行きます。そこならもう本当に明るくて匂いがよくて立派な人たちでいっぱいです。わたしたちの代わりにボートに乗れた人たちは、きつとみんな助けられてめいめい自分のお家やらに行くのです。さあ、もうじきですから」

乗客「あなた方はどちらからいらつしやったのですか、どうなすつたのですか」

青年「いえ、氷山にぶつつかって船が沈みましてね。私は大学へ入っていて家庭教師にやとわれていたのですが、こちらのお父さんが急な用で本国へお帰りになったので、あとから発つたのです。ところが、今日か昨日のあたりです。船が氷山にぶつつかって一ぺんに傾き沈みかけました。月のあかりはどこかぼんやりありましたが、霧が非常に深かったです。ボートは左舷の方半分はもうだめになっていましたから、とてもみんなは乗り切らないのです。わたくしは必死となって、どうか小さな人に乗せてくださいと叫びました。近くの人たちはすぐ道を開いてくれましたが、ボートまでのところには、まだまだ小さな子どもたちや親なんかいて、とても押しつける勇気がなかったのです。それでも、どうしてもこの方をお助けするのがわたくしの義務だと思いましたが、前にも押しつけようと思いませんでした。けれども、またそんなにして助けてあげるよりはこのまま神の御前に行くほうが、わたくしたちの幸福だとも思いました。それからまた、その神に背く罪はわたくし一人ではよってぜひと助けてあげようと思いましたが、けれども、どうしても見ているとそれが出来ないのです。

そのとき俄かに大きな音がしてわたくしたちは水に落ち、それからぼうつとしたと思ったら、もうここへ来ていたのです。この方のお母さんは一昨年、亡くなされました。

ボートはきつと助かったにちがいありません。何せよほど熟練な水夫たちが漕いですばやく船から離れていましたから」

ジヨバンニ「ああ、その大きな海はパシフィックというのではなかったらうか。その氷山の流れる北の果ての海で、風や凍りつく潮水や烈しい寒さとたたかって誰かが一生けんめに働いている。僕はその人に本当に気の毒でそしてすまないような気がする。僕はその人の幸いのために一体どうしたらいいのだろう」

なにがしあわせかわからないです

ほんとうにどんなつらいことでも

それがただしいみちをすすむなかのできごとなら

とうげののぼりもくんだりも

みんなほんとうのこうふくにちかづくひとあしずつですから

ゴトゴトゴトゴト、ゴトゴトゴトゴト

汽車はきらびやかな燐光の川の岸を進みました。向こうの方の窓を見ると野原はまるで幻燈のようでした。

百や千もの大きささまさまの三角標。その大きなものの上には赤い点々をうった測量旗も見え、野原のはてはそれらがいちめん、たくさんたくさん集まってぼうつと青白い霧のよう。

そこに吹くすきとおったきれいな風は、ばらの匂いでいっぱいでした。

乗客「いかがですか、こういうリングゴははじめてでしょう」

青年「おや、立派ですねえ。ここらではこういうリングゴができるのですか」

乗客「まあ、どうかおとり下さい」

青年、リンゴをうけとる

乗客「さあ、坊ちゃんがた。いかがですか、おとり下さい」

カムパネルラ「ありがとう」

ジヨバンニ「…ありがとう」

二人、リンゴをうけとる

青年「どうも、ありがとう。どこでできるのですか、こんな立派なリンゴは」

乗客「この辺ではもちろん農業はいたしますけれども、大ていひとりでいいものができそうな約束になっております。自分の望む種子さえ播けばひとりでにどんどんできます。けれども、あなたがたのいらっしゃる方なら農業はもうありません。リンゴだってお菓子だって、かすが少しもありませんから、みんなその人その人によって違ったわずかのいい香りになって毛あなからちらけてしまうのです」

川下の向こう岸に青く茂った大きな林が見え、その枝には熟してまっ赤に光る円い実がいっぱいありました。

森の中からはオーケストラベルやジロフォンに混じって、何とも云えずきれいな音色がとけるように浸みるように風につれて流れてくるのです。

女の子「まあ、あのカラス」

カムパネルラ「カラスでない。みんな、かささぎだ」

ジヨバンニ「河原のあかりの上にたくさん列になってとまっているよ」

青年「かささぎですねえ、頭のうしろのところに毛がびんと延びてますから」

カムパネルラ「あ、孔雀が居るよ」

女の子「ええ、たくさん居たわ。森の上で羽をひろげたり閉じたりしていたの」

カムパネルラ「そうだ、孔雀の声だっさっき聞こえた」

女の子「ええ、三十四くらいはたしかに居たわ。ハーブのように聞こえたのは、みんな孔雀よ」

ジヨバンニ「カムパネルラ、ここからはねおりて遊んで行こうよ」

川は二つにわかれました。まっくらな島のまん中に高い高いやぐらが一つ組まれて、その上に一人の寛い服を着た男が立っていました。両手に赤と青の旗をもって、そらを見上げて信号しているのです。

その人はしきりに赤い旗を振っていましたが、俄かに赤旗をおろして後ろに隠すようにし、青い旗を高く高くあげて、まるでオーケストラの指揮者のように烈しく振りましました。

すると、空中にざあっと雨のような音がして桔梗色のがらんとした空の下を、実に何万という小さな鳥どもがめいめいせわしく鳴いて通って行くのでした。

いまこそ渡れわたり鳥、いまこそ渡れわたり鳥

ジヨバンニ「鳥が飛んでいくな」

カムパネルラ「本当だ、すごい数だ」

女の子「まあ、この鳥たくさんですわねえ。あらまあ、そらのきれいなこと」

ジヨバンニ「……」

女の子「……あの人、鳥へ教えてるんでしょか」

カムパネルラ「わたり鳥へ信号してるんです。きつと、どこからか狼煙があがるためでしょう」

ジヨバンニ「どうして僕はこんなになさしいのだろう。僕はもつと心もちをきれいに大きく持たなければいけない。あすこの岸のずうっと向こうにまるでけむりのような小さな青い火が見える。あれは本当に静かでつめたい。僕はあれをよく見て心もちをしずめるんだ」

カムパネルラと女の子、笑いあう

ジヨバンニ「ああ、ほんとうにどこまでもどこまでも僕と一緒に行く人はないだろうか」

カムパネルラだって、あんな女の子とおもしろそうに話しているし、僕は本当につらいなあ」

そのとき、汽車はだんだん川からはなれて、崖の上を通るようになりました。そして向こう岸にちらっと大きなとうもろこしの木を見ました。

それはだんだん数を増してきて、もういまは列のように崖と線路との間にならび、美しいそらの野原の地平線の果てまでその大きなとうもろこしの木がほとんど一面に植えられていました。

さやさや風にゆらぎ、まるで昼のあいだにいっぱい日光を吸った金剛石のように露がいっぱいについて、赤や緑やきらきら燃えて光っているのです。

カムパネルラ「あれ、とうもろこしだねえ」

ジヨバンニ「…そうだろう」

カムパネルラ「…」

汽車はだんだん静かになって、いくつかのシグナルと転てつ機のあかりを過ぎ、小さな停車場にとまりました。

カムパネルラ「驚の停車場だ」

正面の青じろい時計はかっきり第二時を示し、その振り子は風もなくなり汽車も動かず、静かな野原の中にカチツカチツと正しく時を刻んでいくのでした。

そしてその振り子の音のたえまを遠くの遠くの野原のはてから、かすかなかすかな旋律が糸のように流れて来るのでした。

全くもう車の中では誰もみんなやさしい夢を見ているのでした。

ジヨバンニ「こんな静かないところで僕はどうしてもっと愉快になれないだろう。どうしてこんなに一人さびしいのだろう。けれども、カムパネルラなんかあんまりひどい。僕と一緒に汽車に乗っていながら、あんな女の子とばかり話しているんだもの。僕は本当につらい」

ジヨバンニが窓の外を見つめていると、すきとおった硝子のような笛が鳴って、汽車は静かに動きだしました。

乗客「ええ、もうこの辺りから下りです。何せ、今度は一ぺんにあの水面までおりて行くんですから容易じゃありません。この傾斜があるもんですから、汽車は決して向こうからこっちへは来ないんです。そら、もうだんだん早くなったでしょう」

どンドン、どンドン、どンドン、どンドン

汽車は降りて行きました。崖のはじめに鉄道がかかるときは、川が明るく下にのぞけたのです。



ジヨバンニはだんだん心もちが明るくなってきました。汽車が小さな小屋の前を通って、その前にしょんぼり一人の子供が立ってこつちを見ているときなどは、思わずほうと叫びました。

どんどん、どんどん、どんどん、どんどん

汽車は走って行きました。室中の人たちは半分うしろの方へ倒れるようになりながら、腰掛けにしっかりしがみついていた。

どこまでも、どこまでも、汽車は走って行きました。

ジヨバンニ「そうだ、カムパネルラと一緒にならどこまでもかけて行ける。世界中だってかけれるんだ」

うすあかい河原などでこの花があちこち咲いている中を、汽車はようやく落ち着いたという風にゆっくりと走って行きました。

向こうとこつちの岸に星のかたちとつるはしを書いた旗が立っていました。

ジヨバンニ「あれ、何の旗だろうね」

カムパネルラ「さあ、わからないねえ、地図にもないんだもの。鉄の舟がおいてあるねえ」

ジヨバンニ「ああ」

女の子「橋を架けるとこじゃないんでしょうか」

ジヨバンニ「ああ、あれ工兵の旗だねえ。架橋演習をしてるんだ。けれど兵隊のかたちが見えないねえ」

その時、向こう岸近くの少し下流の方で見えない天の川の水がぎらっと光って柱のように高く跳ねあがり、どおっと烈しい音がしました。

カムパネルラ「発破だよ、発破だよ」

ジヨバンニ「空の工兵大隊だ。どうだ、鱒やなんかまるでこんなになって跳ねあげられたねえ。僕、こんな愉快な旅はしたことない」

カムパネルラ「あの鱒なら近くで見たらこれくらいあるねえ。たくさん、さかな居るんだな、この水の中に」

女の子「小さなお魚も居るんでしょうか」

ジヨバンニ「居るんでしよう。大きなのが居るんだから小さいのもいるんでしよう。けれど遠くだから、いま小さいの見えなかったねえ」

女の子「あれ、きっと双子のお星さまのお宮よ」

ジヨバンニ「双子のお星さまのお宮って何だい」

女の子「あたし、前に何べんもお母さんから聞いたわ。ちゃんと水晶のお宮で二つならんでいるからきつとそうだわ」

カムパネルラ「双子のお星さまが何したっての」

女の子「あのね、天の川の岸にね、お母さん、お話なすったわ…」

川の向こう岸が俄かに赤くなりました。

10場 サソリの火

楊の木や何もかもまっ黒にすかし出され、見えない天の川の波もちらちら針のように赤く光りました。

向こう岸の野原に大きなまっ赤な火が燃され、その黒いけむりは桔梗いろの冷たそうな天をも焦がしそうでした。

ルビーよりも赤くすきとおり、リチウムよりもつくしく酔ったようになってその火は燃えているのでした。

ジヨバンニ「あれは何の火だろう。あんな赤く光る火は何を燃やせばできるんだろう」  
カムパネルラ「サソリの火だな」

女の子「あら、サソリの火のことなら、あたし知ってるわ」

ジヨバンニ「サソリの火って何だい」

女の子「サソリが焼けて死んだのよ。その火が今でも燃えてるってあたし何べんもお父さんから聞いたわ」

ジヨバンニ「サソリって虫だろう」

女の子「ええ、サソリは虫よ。だけどいい虫よ」

ジヨバンニ「サソリ、いい虫じゃないよ。博物館でアルコールにつけてあるの見た。尾にこんなかぎがあつて、それで刺されると死ぬって先生が云ったよ」

女の子「そうよ。だけどいい虫だわ。お父さん、こう云ったのよ。むかしのバルドラの野原に一ぴきのサソリがいて小さな虫やなんか殺して食べて生きていたんですって。するとある日、イタチに見つかって食べられそうになったんですって。サソリは一生けんめい逃げたけど、とうとうイタチに押さえられそうになって、そのときいきなり前に井戸があつてその中に落ちてしまったわ。もうどうしても上がられないで、溺れはじめたサソリはこう云つてお祈りしたと云うの」

ああ、私は今までいくつのものの命をとったか分からない

そしてその私が今度イタチにとられようとした時はあんなに一生けんめい逃げた

それでも、とうとうこんなになつてしまった

どうして私は私の身体をだまつてイタチにくれてやらなかつたらう

そうしたらイタチも一日生きのびたろうに

どうか、神さま。私のところをごらん下さい

こんなにむなしく命を捨てず、どうかこの次には

まことのみんなの幸せのために私の身体をお使い下さい

女の子「そしたらいつかサソリは自分の身体がまっ赤なうつくしい火になって燃えて、夜のやみを照らしているのを見たって。それが今でも燃えているって。

本当にあの火それだわ」

カムパネルラ「そうだ、見たまえ。そこらの三角標はちょうどサソリの形にならんでいるよ」

大きな火の向こうに三つの三角標がちょうどサソリの腕のように、こっちに五つの三角標が尾やかぎのようにならんでいるのを見ました。

そして本当にそのまっ赤なうつくしいサソリの火は、音なくあかるくあかるく燃えたのです。

青年「もうじきサウザンクロスです。降りる支度をしてください」

ジヨバンニ「僕たちと一緒に乗って行こう。僕たちどこまでだって行ける切符を持っているんだ」

女の子「だけど、あたしたちもうここで降りなきゃいけないのよ。ここ、天上へ行くところなんだから」

ジヨバンニ「天上へなんか行かなくなっちゃっていいじゃないか。僕たち、ここで天上よりももっといいところをこさなきゃいけないって僕の先生が云ったよ」

女の子「だっておっかさんも行ってらっしゃるし、それに神さまが仰るんだわ」

ジヨバンニ「そんな神さま、うその神さまだい」

女の子「あなたの神さま、うその神さまよ」

ジヨバンニ「そうじゃないよ」

青年「あなたの神さまってどんな神さまですか」

ジヨバンニ「僕、ほんとうはよく知りません。けれども、そんなでなしに本当にたった一人の神さまです」

青年「本当の神さまはもちろなかった一人です」

ジヨバンニ「ああ、そんなでなしにたった一人の本当のほんとうの神さまです」

青年「わたくしはあなた方が、今にそのほんとうの神さまにお会いになることを祈ります。さあ、もう支度はいいんですか、じきサウザンクロスですから」

ああ、そのときでした。見えない天の川のずうっと川下に青や橙や、もうあらゆる光でちりばめられた十字架が川の中から立ってかがやき、その上には青じろい雲がまるい環になって後光のようにかかっているのです。

ハルレヤ、ハルレヤ、ハルレヤ、ハルレヤ

そして、たくさんのシグナルや電燈のあかりの中を汽車はだんだんゆるやかになり、とうとう十字架のちょうど真向かいに行つてすつかりとまりました。

青年「さあ、おりるんですよ」

女の子「じゃ、さよなら」

ジヨバンニ「さよなら」

硝子の呼び子が鳴らされ汽車は動きだし、と思ううちに銀いろの霧がすうつと流れてきてもうそつちは何も見えなくなりました。

ジヨバンニ「カムパネルラ、また僕たち二人きりになったねえ。どこまでもどこまでも

一緒に行こう。僕はもうあのサソリのように本当にみんなの幸せのためな

らば、僕の身体なんか百ぺん灼いてもかまわない」

カムパネルラ「うん、僕だってそうだ」

ジヨバンニ「けれども本当の幸いは一体何だろう」

カムパネルラ「僕、分からない」

ジヨバンニ「僕たち、しつかりやろうねえ」

カムパネルラ「あ、あすこ石炭袋だよ。そらの孔だよ」

そつちを見ると、天の川の一とこに大きなまっくらな孔がどおんとあいているのです。

その底がどれほど深いかその奥に何があるか、いくら眼をこすつてのぞいてもなんにも見えずただ眼がしんしんと痛むのです。

ジヨバンニ「僕、もうあんな大きな暗の中だつて怖くない。きっとみんなの本当の幸い

をさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たち一緒に行こう」

カムパネルラ「ああ、きつと行くよ。あすこの野原はなんてきれいだろう。みんな集まってるねえ」

ジヨバンニ「…カムパネルラ」

カムパネルラ「あすこが本当の天上なんだ。あ、あすこにいるの僕のお母さんだよ」

ジヨバンニはカムパネルラの指差した方を見てみましたが、そこはぼんやり白くけむっているばかり、どうしてもカムパネルラが云ったように思われませんでした。

何とも云えずさびしい気がして外を見ていたら、向こうの川岸に二本の電信柱が丁度、両方から腕を組んだように赤い腕木をつらねて立っていました。

ジヨバンニ「カムパネルラ、僕たち一緒に行こうねえ」

ジヨバンニがこう云いながら振り返って見ましたら、その今までカムパネルラの座っていた席にかたちは見えず、ただ黒いびろうどばかり光っていました。

ジヨバンニは誰にも聞こえないように窓の外へ身体を乗り出して、力いっぱいはげしく胸を打って叫び、それからもう咽喉いっぱい泣きだしました。

もうそこらが一ぺんにまっくらになったように思いました。

お前の友達がどこかへ行ったのだろう

ああ、どうしてなんですか

あの人はね、本当に今夜、遠くへ行ったのだ

お前はお前の切符をしっかりと持っておいで

僕はカムパネルラと一緒に真つすぐに行こうと云ったんです

みんながそう考える。けれども一緒には行けない

さあ、切符をしっかりと持っておいで

ジヨバンニは眼をひらきました。もとの丘の草の中に疲れてねむっていたのです。

町はすっかりさっきの通りに下でたくさんのおかりを綴ってはいましたが、その光はなんだかさつきより熱したというふうでした。

たったいま夢で歩いた天の川もさっきの通りに白くぼんやりかかり、その右には蠍座の赤い星がうつくしくきらめき、そら全体の位置はそんなに変わってもいないようでした。

ジヨバンニ「…そうだ、おっかさんが待ってる…」

ジヨバンニは一さんに丘を走って下り、黒い松の林の中を通ってさっきの牛乳屋のところにまた来ました。

ジヨバンニ「今晚は」

牛乳屋2が出てくる

牛乳屋2 「はい、何のご用ですか」

ジヨバンニ 「今日、牛乳がぼくのところへ来なかったのですが」

牛乳屋2 「あ、すみません」

牛乳屋2、奥から牛乳を取ってくる

牛乳屋2 「本当にすみませんでした。今日は昼過ぎにうっかりして子牛の柵をあけておいたもんで、親牛のところへ行つて半分ばかり吞んでしまいましたね…」

ジヨバンニ 「そうですか、ではいただいて行きます」

ジヨバンニはまだ熱いミルクの瓶をもって牧場の柵を出ました。

そして、しばらく木のある町を通つて行きますと道は十文字になっていて、その右手の方には、さつきカムパネルラたちがあかりを流しに行った川へかかった大きな橋のやぐらが夜のやみにぼんやり立っていました。

ところが、その十字になった町かどや店の前に女たちが何人も集まって、橋のほうを見ながら何かひそひそ話しているのです。

ジヨバンニはなぜかさあつと胸が冷たくなったように思いました。

ジヨバンニ 「何かあったんですか」

町の人 「子どもが水へ落ちたんですよ」

ジヨバンニは夢中で橋の方へ走りました。

橋の上は人でいっぱい川が見えませんでした。白い服を着た巡査も出ていました。

ジヨバンニは橋の袂から飛ぶように下の広い河原へおりました。

その河原の水際に沿つてたくさんあかりがせわしくのぼったり下ったりしていました。

向こう岸の暗い土手にも火がいくつも動いていました。そのまん中をもう烏瓜のあかりもない川が、わずかに音をたてて灰いろに静かに流れていたのです。



「河原のいちばん下流の方に人の集まりがくつきりまっ黒に立っていました。ジョバンニはどんどんそっちへ走りました。」

町の人1 「ジョバンニ、カムパネルラが川へはいったよ」

ジョバンニ 「どうして、いつ」

町の人2 「ザネリがね、舟の上から烏瓜のあかりを水の流れる方へ押してやろうとしたんだ。そのとき、舟がゆれたもんだから水へ落っこつたろう」

町の人3 「すると、カムパネルラがすぐ飛びこんだんだ。そしてザネリを舟の方へ押してよこした」

町の人 「けれどもあと、カムパネルラが見えないんだ」

ジョバンニ 「みんな探してるんだろう」

町の人2 「ああ、すぐみんな来た。カムパネルラのお父さんも来た。けれども見つかからないんだ。ザネリはうちへ連れられてった」

ジョバンニはみんなの居るほうへ行きました。そこに町の人たちに囲まれて、青白い顔をしたカムパネルラのお父さんが手にもった時計をじっと見つめていたのです。

ジョバンニ 「…カムパネルラはきつともうあの銀河のはずれにしか居ないんだ…」

カムパネルラの父 「もう駄目です。落ちてから四十五分たちましたから」

ジョバンニ 「僕はカムパネルラの行ったほうを知っています。僕はカムパネルラと一緒に歩いていたのです」

カムパネルラの父 「あなたはジョバンニさんでしたね。どうも、今晚はありがとう」

ジョバンニ 「…」

カムパネルラの父 「あなたのお父さんはもう帰っていますか」

ジョバンニ 「いいえ」

カムパネルラの父 「どうしたのかなあ。僕には一昨日、大へん元気な便りがあったんだが。今日あたりもう着くころなんだが、船が遅れたんだな。ジョバンニさん、明日の放課後、みなさんとうちへ遊びに来て下さいね」

ジョバンニはもう色々なことで胸がいっぱいで何にも云えず、博士の前をはなれて早くお母さんに牛乳を持って行って、お父さんの帰ることを知らせようと思うと、もう一目散に河原を町の方へ走りました。

こんなにもなしく命を捨てず、どうかこの次には、まことのみんなの幸せのために私の身体をお使い下さい。

僕、もうあんな大きな暗の中だって怖くない。どこまでもどこまでも、僕たち一緒に進んで行こう。

きつと行くよ

きつと行くよ

きつと行くよ

ああ、きつと行くよ

幕